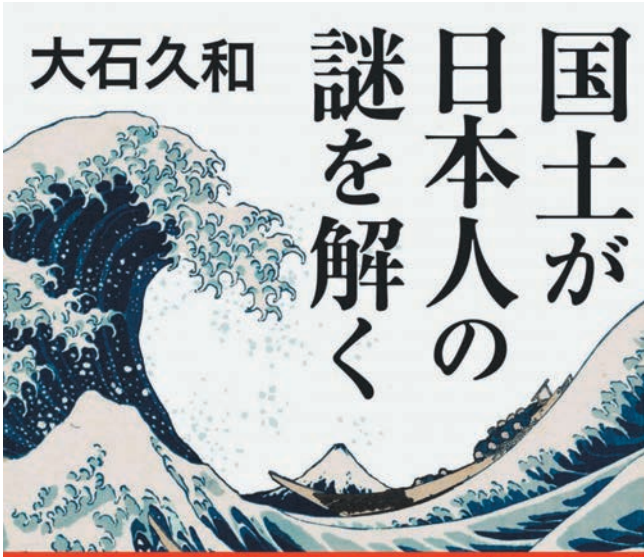


シリーズ「国土教育」 『国土が日本人の謎を解く』で学ぶ、日本人のアイデンティティ



「日本人論」の教科書

「WILL」編集長 花田紀凱氏
日本人が再び羽ばたくための処方箋

「考える人」編集長 河野通和氏
知の100本ノック！日本人の底力を問う

「中央公論」編集長 安部順一氏
「災害」列島が日本人の思考に何をもちたらしめたかを解く！

自虐も「戦後洗脳」も吹き飛ばす日本人論
なぜ日本人はここまで世界の人々と違うのか。「戦後」よりはるかに長い時間が大量虐殺の歴史を持つ国々と、災害死の国・日本の違いを生んだ。国土学の第一人者が日本人の強みも弱みも解き明かす。
戦後70年だからこそ
問い直したい日本人とは何か。

失われた20年と言われる長期デフレで、日本は経済的ダメージ以上に日本人としての誇りと自信を失った。少子高齢化が日本の先細りを予見させる中で大切なのは「日本人をとりもどす」こと。『国土が日本人の謎を解く』（大石久和著、産経出版社）は、世界と日本の違いを理解することから日本人を再考しようと言説。日本人の特質を育んだ国土を知ることを出発点にした大胆な仮説と丁寧な検証。新たな日本人論は、ミステリアスな世界に読者を誘う。

本書は、ヨーロッパから見ると歴史「変わることを尊ぶれば極東に位置する島国」「日文化」「災害死史観」を持つ「本」の国土が、長い時間をか「天為の国」が日本（人）として、けて世界に誇るべき日本人の日本人であることを見つめ直アイデンティティを育んだし「日本人をとりもどす」こそその謎を解き明かす大きな物とから再出発しようと言語始語である。

序章で、国土の自然条件と第一章は、「地震」「津波」「火そこでの経験が民族の個性を山活動」「風水害」そして「飢規定すると定義。「積み重ねる歴史」「変わらないことを害史を掘り下げる。大規模な大切にする文化」「紛争死史自然災害が、日本人のもの観」を持つ「人為の国」ヨーロッパ（人）に対し、「流れ与え、日本の歴史を動かして

きたと解説。「御成敗式目」はなぜ1232年に制定されたのか？「法然、親鸞、一遍、栄西、道元、日蓮など、鎌倉新仏教の巨星たちがなぜこの時代に生まれたのか？」「八代將軍徳川吉宗の子孫のみが、なぜ御三卿という將軍家を継承できる特別の権利を認められたのか？」「幕末・明治維新の背景には何があつたのか？」。取り扱われる歴史テーマは興味深い。

第二章は、日本の国土の自然条件の特異性（日本の国土は他国とどう違うか）を解き明かす。

日本人を育んだ国土とは、①複雑で長い海岸線と細長い弓状列島②四島に分かれた国土の主要部分③脊梁山脈の縦断④不安定な地質⑤狭くて少ない平野⑥軟弱地盤上の都市⑦大地震の可能性⑧集中豪雨

ヨーロッパの「公」に対する、日本の「共」

⑨強風の常襲地帯⑩広大な積雪寒冷地域……という10ほどの厳しい自然条件とその重複であった。

先人たちは頻発する災害に絶望したり、くじけることなく、繰り返し災害からの復興を果たし、大変な努力で、より安全でより効率的な国土をつくりあげた。日本人の勤勉性はこうした努力によってもたらされた、と誇る。

フランスとイギリスの間のドーバー海峡の幅は約30キロしかなく、紀元前のローマ時代にさえ大軍が渡ることができた。朝鮮半島と日本列島を隔てる対馬海峡は幅約200キロもある。大昔からこれを越える人の往来があり文化の交流はあつたが、大軍が越えることはできなかった。この大陸との微妙な距離感が、わが国の歴史や日本人の成り立ちを規定したと解説。

サミュエル・ハンチントンの名著『文明の衝突』において、イギリスが西欧文明に含まれるのに対し、日本文明は中華文明に含まれない独立した文明で、北方・西方・南方の各種文明が集合し、新たな文明を育てた「るつぼ」であるとも解く。これが章末の「日本の文明は中国文明の一派などではない」との強いメッセージにつながる。

第三章から第五章で、ヨーロッパの「公」に対する、日本の「共」、中国の「権力」という構造を解き明かす。

「日本はいつからか『日本になった』のではなく初めから日本だった。過去に『建国理念』を宣言したり、独立宣言や人権宣言を持ってきた国

点描
道の駅

国道愛好家 松波成行

「ふるさとの訛なつかし停車場の人ごみの中にそれを聴きにゆく啄木」。かつて駅に行く一つの愉しみでもあつたのが、ブルートレインや夜行列車を見に行くことでした。大きな荷物を抱えて列車に乗り込む人の表情は帰省や観光で故郷に向かう希望や愉しみにあふれ、向かう先の地方の「訛」に巡り合うと、たとえ旅をしていなくとも「旅情」を感じるものでした。今や夜行列車は風前の灯火となり、そのような場面に立ち会うことも少なくなっています。

車による旅では画一的なコンビニを避け、

柄ではない。移民した人々が建国したアメリカはもちろんだ、ドイツもフランスも、戦争や革命などを経て、『現在の国になった』のだが、世界の中でほとんど唯一、日本は「現在につながる国が昔からあつた」のである。

「おわりに」の中で日本人論の核心がこう語られる。興味深いシナリオ展開と数々の新たな発見、中等教育国語科教材で取り上げられるレベルの、平易な文体が、一気に読者を誘い込む。氏の前著『国土と日本人—災害大国の』へ雄飛する道である」と結ぶ。

できるかぎり地元のスーパーに足を運ぶようにしています。地域の特徴的な食材がどのように陳列され、賞味されているのか。調味の種類や味は多様であり多彩で、特に牛乳や醤油といった地域色が強い銘柄はどのような味覚への指向だけでなく、もう一つ、店に集う地元の人々の会話や行き交う言葉の訛を聞くと、その地域にきたという実感や「旅情」を一層強く感じることができます。

道の駅は旅行者をターゲットとすると同時に、地域の連携の場であることも重視して発展してきました。地元の人々が憩う道の駅、地元の人々に活用される道の駅。地方創生の中で道の駅が地元とより強く結び付き、地域外との結接点となることで、道の駅からさらに旅情が感じ取れるようになるでしょう。